

保育内容「人間関係」の指導法の意識に関する一考察  
—保育者の経験年数に着目した質問紙調査の結果から—

岸 正寿    戸田 大樹    荒木 由紀子

『教育学論集』第70号

(2018年3月)



## 保育内容「人間関係」の指導法の意識に関する一考察 —保育者の経験年数に着目した質問紙調査の結果から—

岸 正寿    戸田 大樹    荒木 由紀子

### 1. はじめに

保育の場は保育者と子どもをはじめとする様々な人間関係が織りなす世界である。この人間関係は出会いに始まり、何らかの変容を経て深まっていくものである。現代において、少子高齢化や核家族化、都市化、情報化、国際化など子どもを取り巻く環境の変化がめまぐるしい中で、人間関係の土台作りをする家庭の変容によって子どもの豊かな人間関係作りが根底から揺らいでいる状況がある。こうした状況の中で、家庭を支え子ども同士のかかわりや人間関係を育む集団保育の場として、幼稚園や保育所における保育の質とともに保育者の専門性が問われてきている。

Portman (1961) は、ヒトは他の哺乳動物に比べて生理的早産<sup>1)</sup>の状態生まれてくると指摘しているが、からだはどんどん成長していき、少しずつ感情が豊かになり、言葉を獲得し、自分の思いを通すために自己主張をしたり、逆に周囲に合わせて自分の行動を変えたりすることもできるようになっていく。人生の初めのわずか数年の間に、子どもはめざましい成長を遂げ、個人の性格の基礎ができる。幼児期はまさに「生涯にわたる人格形成の基礎を培う時期」である。人間は生まれながらに持っている「人とのかかわる力」を次第に変化させていく。これを支えるのが他者とのかかわりであり、人と人との間で起きる相互作用を通じて人とのかかわる力が育まれていく。

平成元年以降、保育内容は「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域から構成されている。領域は子どもの発達をとらえるための教育の視点として考えられているものであり、子どもたちの発達はこれらの領域が相互に関わり合って総合的に発達していくこと、小学校以上の「教科」の捉え方とは異なることを理解することが重要である。2017年3月に告示された幼稚園教育要領においても、「各領域におけるねらいは幼稚園における生活全体を通じ、幼児がさまざまな体験を積み重ねる中で相互に関連を持ちながら、次第に達成に向かうものであること。内容は幼児が環境に関わって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されるものであることに留意しなければならない」と明記されている。また、2017年3月告示の保育所保育指針では、幼児教育・保育は教育と「養護における『生命の保持』及び『情緒の安定』に関わる

保育の内容と、一体となって展開されるものであることに留意が必要である」とされている。これらの改定を踏まえ、保育者養成校（以下、養成校とする）は即戦力となる幼稚園教諭や保育士、保育教諭の養成に向けて大きな役割を担う。そこで、国は質の高い保育者養成を意図し、「幼児と人間関係」の科目を設けることとした。これは保育内容5領域である保育内容（人間関係）の理論部分に該当し、養成校はこの理論を基盤として学生に保育内容（人間関係）の指導法などで理論と演習の一体化を図る。しかし、保育内容（人間関係）の指導法をテーマとする研究は少ない。以下に、養成校と保育内容（人間関係）に関連する研究を示す。

小松・杉山・東・荒川（2009）は、保育者が養成校に求めている学びについて、卒業後2年目の保育者に質問紙調査を実施し、働き始める直前の意識と保育者として1年半弱経過した後の比較分析を行った結果、①自己実現を求めて旺盛な学習意欲を持つ保育者が多い一方で、②学びたい分野は「原理的なもの」よりも「実践的なもの（保育の知識や技能）」とした保育者が多いこと、③非正規雇用によって不安定な生活を強いられ追い込まれた状況にある保育者が存在すること、④充実感・成長観を持ってないまま「学ばなければ」の状況に追い込まれている保育者が存在すること、⑤子どもや同僚、上司、保護者との人間関係に不安や悩みを持つ保育者も少なくないことを指摘している。また、永渕・橋口（2014）は、園長と養成校教員へのインタビューから、保育者養成校の学生に求められる人間関係力を調査し、それが育っていない現状認識を示した。さらに、赤堀（2007）は、領域「人間関係」の授業には、学生自身の人間関係力を育てるとともに、子どもたちの人間関係に介入して人間関係力を育てる技量を身につけるという2つの目的を持たなくてはならないと指摘している。これ等に加え、岸・戸田・荒木（2017）は、幼児の年齢別における入園から卒園までの1年間の人間関係の形成の過程に着目して、幼児期の人間関係の形成に効果的な指導法のあり方について17の事例を基に検討した結果、①他者の存在に気付く ②友達存在を知る ③自己主張が先行する ④自己主張が通らないことがあり、葛藤する ⑤集団で過ごす充実感を感じる ⑥友達を思いやる、相手の気持ちに立てるようになるという過程が示されたことを明らかにしている。また、保育者のかかわりとして、支持的風土の雰囲気を創ることが幼児の豊かな人間関係の形成につながることを示唆している。

秋田・佐藤・岩川（1991）は、初任教師と熟練教師はビデオで授業を視聴した際、注目している点に違いが表れることを指摘している。初任教師は子どもの様子を見たまま、感じたまま表層的に語るのに対して、熟練教師は積極的に多くの推論を行い、これからの展開を予想することを明らかにしている。また、高濱（2001）は、初任保育者はクラス組織の運営に目が向きがちだが、熟練保育者は、幼児一人一人に関心が向くことを指摘している。このように、保育者の経験年数や熟練度が幼児の人間関係の指導法に差異をもたらすことが推測される。

以上を踏まえ、幼児期の子どもに極めて重要である人間関係の形成に与える保育者の経験年数に着目した示唆的な研究は少ないため、保育者の適切な指導法についての検討が必要である。本稿は、保育者の経験年数別における保育内容（人間関係）の効果的な指導法について質問紙調査によって検討することを目的とする。

## 2. 先行研究の検討

### (1) 保育経験年数の差異と指導法の関係について

高濱（1998）は幼児の状態の捉え方や幼児理解の方法には、経験による違いがあると指摘している。経験者は複数の視点から幼児の状態を捉えるが、初心者は単一の視点から捉えていた。幼児理解の方法として、経験者は幼児の問題に応じて特定の場面や状況を選んで関与することをあげたが、初心者は幼児と一緒に遊んだりして観察することをあげた。また、初心者は探りながら対応するが、経験者はその状況を待ち構えたり、あらかじめねらいをもっていると考えられ、経験者は幼児の状態や行動に関する何らかの予測や推論をしていることを指摘している。さらに、高濱（2000）は幼稚園の教師が熟達化に伴って、保育上の問題をどのようにとらえ、それをいかに解決するようになるかを検討した結果、幼児と指導についての知識は、初心者より中堅者と経験者で多かった。中堅者と経験者の知識量に差はないが、経験者の知識はより構造化されていることが明らかとなった。初心者と経験者の違いは、幼児を捉える文脈とその捉え方に示されており、経験者はその指導の難しい幼児に多くの推論をし、幼児の状態を具体的かつ詳細な文脈情報を使って捉えていた。これらの結果から、保育者は熟達するにつれて豊富な構造化された知識を持つようになること、保育上の問題解決には、文脈と結びついた手がかりやこつが使われること、その手がかりやこつは幼児の個人差や発達の変化によって変わることを指摘している。

中（1996）は、経験年数による保育者の発達観や指導観、子どもへの認識観等から構成される保育観について検討した結果、新任保育者は、子どもの行動面を重視して保育を行うのに対し、熟練保育者は子どもの自発性や興味・関心等心理的側面を配慮して子どもとかかわろうとする意識が見られるという特性があることを指摘している。さらに、保育者の保育観の形成過程を検討すると、新任では子どものあるがまを受け入れることが難しく、抑圧的に上から指導しようとする傾向が見られ、経験を積むことで指導の観点の変化や幼児の捉えが高くて気になることを示唆している。

このように、保育者の経験年数の増加とともに視点の増加や保育に見通しが持てる等、実践力の向上をもたらす指摘が散見されるが、一方で、経験年数が欠点として働く場合があるとする知見も見られる。森上（2000）は保育者の経験年数の増加によるマイナスの側面について言及している。そこでは経験年数を重ねることにより、保育者のかかわり方のくせや、惰性化やマンネリ化が生じてくることを指摘している。さ

らに、三谷（2007）は保育経験を積み重ねた際の特徴として、長年の保育経験によって身についた園文化や保育姿勢が、時に子どもに対するスタンスの柔軟性を奪い、硬直化する可能性があることを指摘している。そして、無意識のうちに新たな発想や子どもの主体的な活動に目が向かなくなっていき、子どもに自分のさせたい活動を一方的に押し付ける可能性があることを指摘している。

佐藤・相良（2017）においては、保育者の経験年数による「幼児理解」の視点の違いについて、現職の保育者を対象に保育場面の映像に基づく自由記述の回答を分析した結果、経験年数の増加、多角的視点による幼児理解や幼児の立場に立った心情理解をもたらす等、正の方向への機能を高めていたことを明らかにしている。これは、情性化やマンネリ化等で示すマイナスの方向ではなく、プラスの方向への変化を示す知見を支持するものであった。しかし、同時に、ベテラン保育者はこうだ、新人保育者はこうだという、常に一樣な知見が支持されるわけでないことも指摘している。「幼児理解」の視点における両者の比較において、ベテラン保育者は目の前の幼児の姿によって、＜背景＞に着目する場合や＜内面的理解＞に着目する場合等、視点を柔軟に変えている可能性を示唆している。

## （2）若手保育者の抱える問題について

近年、保育ニーズが多様化する中、幼稚園教諭や保育士の勤務環境は厳しくなっており、その心身の負担は増大している（安達，2001）。特に、新任保育者は他の年代よりもストレスが高く（上村・七木田，2006）、新人保育者はストレス耐性力が低いことが指摘されている（上村，2012）。また、若い保育者はバーンアウトに陥る危険性が高いことが指摘されている（斎藤・田中・村松・橘・宮岡，2009）。

新任保育者は、保育技術の未熟さに関する悩みを抱えたり（芳賀・西脇，2007；小松・杉山・東・荒川，2009；斎木・上田・中川，2004）、専門的な知識の不足を感じたりする傾向が強く（小野寺，2005）、様々な困難を抱えやすいため、早期に離職する場合もある（社会法人全国保育士養成協議会，2009）。三宅（2005）は保育者効力感に関する主要な先行研究と、その周辺に位置する研究の概観を行った結果、保育者効力感と類似した概念である教師効力感の研究が盛んになされていることを比較して、保育者効力感研究はまだ少数であり、今後の発展が待たれる領域であることを指摘している。

保育能力に関係する要因の一つとして、「保育者効力感（preschool teacher efficacy）」という概念が提唱されるようになってきている。三木・桜井（1998）は保育者効力感とは、「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為を取ることができる信念」と定義し、「教師効力感（teacher efficacy または teacher's sense of efficacy）」の保育者版といえるものであると指摘している。

西坂（2002）は、保育者効力感は幼稚園教諭のストレス評価の4側面（「園内の人間関係の問題」、「仕事の多さと時間の欠如」、「子ども理解・対応の難しさ」、「学級経営の難しさ」）のうち、「子ども理解・対応の難しさ」や「学級経営の難しさ」の2つのストレス評価の低さに関わっていることを指摘している。加藤・安藤（2012）は新任保育者を含む保育者の困難さやストレス、メンタルヘルスに関する先行研究を概観したところ、職員間の理解不足も含めた職場の人間関係、業務負担の多い勤務環境、保育技能の未熟さに関することが職務上の困難を感じる要因になっていることを指摘している。また、加藤・安藤（2013a）は、新任保育者へ職務上の困難感に関するインタビュー調査を行ったところ、新任保育者は主として、「保育者としての未熟さ」「仕事の大変さ」「人間関係の困難さ」を抱えており、それらは相互に影響し合っていること、また新任保育者のメンタルヘルスを考える上で職場の人間関係が重要であることが示された。さらに、加藤・安藤（2013b）は、新任保育者の抱える職務上の困難感の内容を具体的に明らかにすることを目的として、職務上の困難感について因子分析を行った結果、「保育の困難感」「仕事の大変さ」「人間関係の困難感」「職員間の理解不足」「仕事のやり甲斐のなさ」「業務負担」の6因子が抽出されたことを明らかにしている。また、質問紙調査の結果から、中堅・ベテラン保育者と比較検討して新任保育者は、クラス経営が難しい、子どもの怪我への対応の不安等の困難感をより強く感じており、園長から見た新任保育者の困難感は、新任保育者が感じているよりも低く、有意なギャップが見られた。以上より、新任保育者は周囲の認識以上に多面的な困難感を抱えていることを示唆している。

その他、片山（2016）は保育経験5年未満の若手保育者を対象に保護者支援の目標、困難感の実態、重視していること等について自由記述式の質問紙調査を実施した結果、所属や経験年数によらず、多様な支援が見いだされ、特に送迎時の会話を重視しており、園と家庭の連続性を大切にしながら発達や個々に直面する課題に応じて、保育者間の連携の下に支援していることを明らかにしている。発達につまずきのある子どもの保護者への支援に困難感が生じていたが、保護者との相互理解や信頼関係の構築を重視していることを確認している。今後の学習ニーズとしては、課題を持つ子どもの保護者や、保護者自身が課題を持つ際の支援法があげられること、養成校では入職後の自己をイメージ化しながら、理論知を固めることの重要性について指摘している。

### 3. 方法

#### (1) 研究機関と調査対象

##### 1) 対象地域・対象者

調査対象は、東京都、埼玉県の私立幼稚園5園と公立幼稚園2園と公立保育所2園と私立保育所4園に勤務する保育者114名とした。2017年6月に施設を通して調



査票（無記名式）を配布し、数日後回答された用紙を幼稚園で回収を行った。回収数は76名であり、このうち欠損値があるものを除く有効回答数70名（有効回答率61.4%）を分析対象とした。

## 2) 調査期間

2017年5月～2017年7月

## (2) 調査内容

### 1) フェイスシート

性別、年齢層、居住地、子育ての有無、所属機関、保育経験年数、保育士資格と幼稚園免許状を取得した学校

### 2) 質問シート

養成校で学んだ保育内容（人間関係）にどれくらい満足しているか（3件法）と主な回答理由、養成校で学んだ保育内容（人間関係）によってどのくらい指導力がついたか（3件法）と主な回答理由、保育中の保育内容（人間関係）の指導力にどれくらい自信があるか（3件法）と主な回答理由、保育中の保育内容（人間関係）の指導力にどれくらい不安を感じるか（3件法）と主な回答理由、保育中の保育内容人間関係の指導力にどれくらい手応え（人間関係の力を育てているという感じ）を感じているか（3件法）と主な回答理由、保育中の保育内容（人間関係）の指導力にどれくらい困難を感じているか（3件法）と主な回答理由、どの程度の経験年数で「保育内容（人間関係）」の指導力に手応え（人間関係の力を育てているという感じ）を感じられるようになったかと主な回答理由、養成校における「保育内容（人間関係）」の学びをどれくらい評価しているかと主な回答理由、実習生の、養成校における「保育内容（人間関係）」の学びをどれくらい評価しているか（3件法）と主な回答理由、実習生への「保育内容（人間関係）」の指導に対して、保育者として第一に求めたいことは何か、乳幼児に対して「保育内容（人間関係）」の指導をする際、あなたは保育者としてどのような点に配慮しているか、保育者の「保育内容（人間関係）」の指導が乳幼児の人間関係の発達にどれくらい影響を与えていると思うか、あなたが考える乳幼児に対する望ましい「保育内容（人間関係）」の指導とは、どのような指導であるか。

### 3) 回答者の属性

保育者の年齢別は、20歳～25歳28名（40.0%）、25歳～30歳16名（22.9%）、30～35歳11名（15.7%）、35歳～40歳6名（8.6%）、40～45歳3名（4.3%）、45歳以上は5名（7.1%）で不明が1人（1.4%）であった。平均年齢は36.7歳（25歳～49



歳)であった。調査の対象となった保育者の性別は、男性4人(5.7%)・女性66人(94.3%)、保育経験年数の平均は4.9年であった。

### (3) 倫理的配慮

本研究は、創価大学人を対象とする研究倫理委員会の承認を得て行った。倫理的配慮として、本研究の調査協力が得られた幼稚園の園長、保護者に書面にて本研究の趣旨と調査協力の依頼を行った。その際に、研究への参加時は自由意志であり、途中不都合が生じた場合はいつでも中断できること、またそれによる弊害もないこと、無記名式のものであり、個人名は特定しないこと、これに関連した研究以外には用いないことなどの説明を文章で伝え、同意を得た保護者のみを調査の対象とした。

### (4) 分析方法

ある項目間の観察について理論上の期待度数と観察度数との食い違いの程度を明らかにするため $\chi^2$ 検定を行った<sup>2)</sup>。統計処理はSPSS(Ver.25)を用いた。また、分析の際、保育者の経験を直接扱った先行研究には、指導方法の研究(梶田・杉村・桐山・後藤・吉田, 1988; 杉村・桐山 1991)がある。これらの研究の対象は学生、経験5年以下の保育者、6年以上の保育者であった。このことから本研究では、保育経験5年以下を「若手保育者」、6年以上を「中堅以上保育者」とした。

## 4. 結果

### (1) 保育経験年数と保育者養成校で学んだ保育内容(人間関係)についての満足度

「保育経験年数別」による「保育者養成校で学んだ保育内容(人間関係)についての満足度」の人数の偏りを調べるために $\chi^2$ 検定を行った結果から、保育者養成校での学んだ保育内容(人間関係)の満足度の高低の配分は保育経験年数によって異なることが判明した( $\chi^2(2)=14.13$ ,  $p<.01$ ,  $V=.275$ )。

残差分析の結果から、中堅以上保育者は若手保育者に比べて「満足している」割合が高く、「不満である」割合が低かった。若手保育者は中堅以上保育者に比べて、「満足している」割合が低く、「不満である」割合が高かった。この結果、保育者養成校を卒業してから6年目以降の中堅以上保育者は、保育者養成校で学んだ保育内容(人

表1 保育経験年数と保育者養成校で学んだ保育内容(人間関係)についての満足度

	満足	どちらともいえない	不満	合計
中堅以上保育者	22 (16.3%)	52 (38.5%)	61 (45.2%)	135 (100%)
若手保育者	2 (3.8%)	11 (21.2%)	39 (75.0%)	52 (100%)
合計	24 (12.8%)	63 (33.7%)	100 (53.5%)	187 (100%)

$\chi^2(2)=14.13$ ,  $p<.01$ ,  $V=.275$

間関係) について満足している傾向を示しており、5年以下の若手保育者は不満である傾向を示していることから、長年の保育の実践を通して養成校での学びが効果的であることを示唆する結果となった。

## (2) 保育経験年数と実習生の保育者養成校での学びの評価

「保育経験年数別」による「保育者養成校における保育内容（人間関係）の学びの評価の高低」の人数の偏りを調べるために $\chi^2$ 検定を行った結果から、実習生の保育者養成校における保育内容（人間関係）の学びの評価は、保育経験年数によって異なることが判明した（ $\chi^2(2)=15.03$ ,  $p<.01$ ,  $V=.294$ ）。

残差分析の結果から、中堅以上保育者は若手保育者に比べて実習生の学びを「評価している」割合が高かった。この結果、卒業後6年目以降の中堅以上保育者には実習生の養成校での学びの効果が実践で発揮されていることを示す結果となった。若手保育者は、実習生と接する機会が少ないことが予測されるが、実習生と接する機会が多い中堅以上保育者から学びと実践が評価されていることを示す結果となった。

表2 保育経験年数と実習生の保育者養成校における保育内容（人間関係）の学びの評価

	評価している	どちらともいえない	評価していない	合計
中堅以上保育者	25 (21.6%)	55 (47.4%)	36 (31.0%)	116 (100%)
若手保育者	0 ( 0%)	32 (55.2%)	26 (44.8%)	58 (100%)
合計	25 (14.4%)	87 (50.0%)	62 (35.6%)	174 (100%)

$$\chi^2(2)=15.03, p<.01, V=.294$$

## (3) 保育経験年数と保育中の保育内容（人間関係）の指導力についての自信・不安・手応え

「保育経験年数別」による「保育者養成校で学んだ保育内容（人間関係）の指導力についての自信」の人数の偏りを調べるために $\chi^2$ 検定を行った結果から、養成校で学んだ保育内容（人間関係）の指導力の自信の有無の配分は保育経験年数によって異なることが判明した（ $\chi^2(2)=12.70$ ,  $p<.01$ ,  $V=.311$ ）。

残差分析の結果から、中堅以上保育者は若手保育者に比べて「自信がある」割合が低かった。若手保育者は、中堅保育者に比べて「自信がある」割合が高かった。この結果、保育経験年数が長いからといって指導力への自信につながるわけではなく、保

表3 保育経験年数と保育中の保育内容（人間関係）の指導力についての自信

	自信ある	どちらともいえない	自信ない	合計
中堅以上保育者	29 (23.4%)	51 (41.1%)	44 (35.5%)	124 (100%)
若手保育者	25 (46.3%)	12 (22.2%)	17 (31.5%)	54 (100%)
合計	54 (30.3%)	63 (35.4%)	61 (34.3%)	178 (100%)

$$\chi^2(2)=12.70, p<.01, V=.311$$

育経験年数が短いほど指導力への自信が高いという興味深い結果となった。

「保育経験年数別」による「保育者養成校で学んだ保育内容（人間関係）の指導力についての不安」の人数の偏りを調べるために $\chi^2$ 検定を行った結果から、保育者養成校での学んだ保育内容（人間関係）の指導力の不安の有無の配分は保育経験年数によって異なることが判明した（ $\chi^2(2)=8.29$ ,  $p<.05$ ,  $V=.215$ ）。

残差分析の結果から、中堅以上保育者は若手保育者に比べて「不安ない」割合が低かった。若手保育者は中堅以上保育者に比べて「不安ない」割合が高かった。この結果、若手保育者は中堅以上保育者よりも不安感が少なく保育をしていることが示唆された。このことは、中堅以上保育者や管理職が若手保育者の不安感を取り除いていることを示唆しているのではないか。

表4 保育経験年数と保育中の保育内容（人間関係）の指導力についての不安

	不安ある	どちらともいえない	不安ない	合計
中堅以上保育者	26 (20.6%)	47 (37.3%)	53 (42.1%)	126 (100%)
若手保育者	5 ( 9.3%)	14 (25.9%)	35 (64.8%)	54 (100%)
合計	31 (17.2%)	61 (33.9%)	88 (48.9%)	180 (100%)

$$\chi^2(2)=8.29, p<.05, V=.215$$

「保育経験年数別」による「保育者養成校で学んだ保育内容（人間関係）の指導力についての手応え」の人数の偏りを調べるために $\chi^2$ 検定を行った結果から、保育者養成校での学んだ保育内容（人間関係）の指導力についての手応えは保育経験年数によって異なることが判明した（ $\chi^2(2)=25.54$ ,  $p<.01$ ,  $V=.375$ ）。

残差分析の結果から、中堅以上保育者は、若手保育者に比べて「手応えある」割合が低く、「手応えない」割合が高かった。若手保育者は中堅以上保育者に比べて「手応えある」割合が高く、「手応えない」割合が低かった。この結果、若手保育者は、自分の保育に手応えを感じている傾向が示され、その手応えはどの要因から感じているのか分析する必要がある。

表5 保育経験年数と保育中の保育内容（人間関係）の指導力についての手応え

	手応えある	どちらともいえない	手応えない	合計
中堅以上保育者	11 ( 8.7%)	48 (37.8%)	68 (53.5%)	127 (100%)
若手保育者	22 (40.0%)	15 (27.3%)	18 (32.7%)	55 (100%)
合計	33 (18.1%)	63 (34.6%)	86 (47.3%)	182 (100%)

$$\chi^2(2)=25.54, p<.01, V=.375$$

#### (4) 保育者経験年数と保育者としてどのような点を配慮して保育しているか

「保育経験年数別」による「保育者としてどのような点を配慮して保育しているか」の人数の偏りを調べるために $\chi^2$ 検定を行った結果から、保育者としてどのよ

うな点を配慮して保育しているかは、保育経験年数によって異なることが判明した ( $\chi^2(3)=8.58, p<.05, V=.137$ )。

残差分析の結果、中堅以上保育者は若手保育者に比べて「受容と共感」を配慮して保育をしている割合が高かった。若手保育者は中堅保育者に比べて「受容と共感」を配慮して保育をしている割合が低かった。この結果、中堅以上保育者と若手保育者の保育の配慮点の違いとして「受容と共感」という子どもを受け入れる、子どもに寄り添うことに対する配慮に差が生じていることを示唆する結果となった。

表 6 保育経験年数と保育者としてどのような点を配慮して保育をしているか

	満足	どちらともいえない	不満	合計
中堅以上保育者	22 (16.3%)	52 (38.5%)	61 (45.2%)	135 (100%)
若手保育者	2 ( 3.8%)	11 (21.2%)	39 (75.0%)	52 (100%)
合計	24 (12.8%)	63 (33.7%)	100 (53.5%)	187 (100%)

$\chi^2(3)=8.58, p<.05, V=.137$

## 5. 考察

本研究で明らかになったことは、以下のとおりである。

- 1) 中堅以上保育者は、若手保育者に比べて保育者養成校での学びに満足している割合が高く、不満である割合が低い傾向が示された。若手保育者は、中堅以上保育者に比べて、養成校での学びに不満である割合が高く、満足している割合が低い傾向が示された。
- 2) 中堅以上保育者は、若手保育者に比べて実習生の養成校での学びを評価している割合が高い傾向が示された。
- 3) 中堅以上保育者は、若手保育者に比べて保育内容（人間関係）の指導力についての「自信がある」割合が低く、「不安ない」割合が低く、「手応えない」割合が高い傾向が示された。一方、若手保育者は中堅以上保育者に比べて「自信がある」割合が高く、「不安ない」割合が高く、「手応えある」割合が高い傾向が示された。
- 4) 中堅以上保育者は、若手保育者に比べて保育者として「受容と共感」を配慮して保育をしている割合が高い傾向が示された。

本研究の結果は、若手保育者の抱える問題についての先行研究の結果で示されたことに相反する興味深い結果となった。若手保育者は、指導力に関して自信があり、手応えがある傾向が示された。保育現場で、園内研修をはじめとした若手保育者の指導力向上に取り組んでいる成果といえるのではないか。

倉橋 (1976) は、「子どもが帰った後、その日の保育が済んで、まずほっとするのはひと時。大切なのはそれからである。子どもといっしょにいる間は、自分のしてい

ることを反省したり、考えたりする暇はない。子どもの中に入りきって、心に一寸の隙間も残らない。ただ一心不乱。子どもが帰った後で、朝からのいろいろなことが思いかえされる。(中略) 大切なのは此の時である。此の反省を重ねている人だけが、真の保育者になれる。翌日は一歩進んだ保育者として、再び子どものほうへ入り込んでいけるから」と保育者の資質として「省察」の必要性を指摘している。このことは、保育者の実践を言語化するうえで省察の重要性を説いたと言える。

谷川(2013)は新任保育者の危機と専門的成長について、省察のプロセスに着目して明らかにすることを目的として幼稚園教諭2名の1年余りにわたる継続的インタビューデータを分析した結果、保育者としての経験のない新任保育者が、新たにフレームを、混乱や葛藤をくぐり抜けて生成していくプロセスであったことを指摘している。新任保育者が省察を通じて専門的成長を遂げるには、直面している問題状況の性質を理解し、具体的に取り組むべき課題を認識することが重要であること、子どもの姿や保育場面を共有している同僚保育者とのインフォーマルなやりとりが、新任保育者の省察を促す重要な役割を担うことを示唆している。さらに、新任保育者は状況の中で混乱する時期があり、自ら問題状況を自覚し、問題の性質を理解するまでには時間を要すること、省察は新任保育者が経験する危機を自身の専門的成長に転換させる行為であること、新任保育者が省察によって問題状況を解釈する枠組みを獲得し、実践に取り組む姿勢に変容が見られるまでには、一定の期間と機会が必要であることを指摘している。

保育現場においては、若手保育者が自身の保育を省察できるようにしていくことが重要であることが示唆された。また、養成校においては保育者が即戦力となる実践力を身に付けていくことも重要ではあるが、入職後の自己をイメージしながら理論知を固められるような学びを促すこと、実践においても、一人ひとりの子どもの命が輝かされ、その子のよさが認められる「受容と共感」ができる保育者の養成が期待される。

## 6. 今後の課題

今後の課題として2点指摘する。本研究の質問紙調査を実施した保育者のサンプル数の拡充である。一般化されたデータから知見を提示するには、幼稚園、保育所、認定こども園のそれぞれの幅広い年齢層の保育者からのサンプル数を追加することが必要である。

2点目に、それぞれの経験年数という変数による比較の課題がある。本研究では、若手保育者と中堅以上保育者の比較において、経験年数という変数による検討を行った。保育者の実践を考える場合、経験年数が同一であったとしても、その中で経験している内容や質が同様であるとは限らない。したがって、今後より詳細に問題を検討していくために、保育者のこれまでの経験についての認識等を併せて考慮していく必

要がある。また、今回は調査対象が若手と中堅以上の2者間の比較だったが経験年数の幅を広げて検討していきたい。

## 謝辞

本論文は、質問紙調査を快く引き受けてくださった、当該幼稚園・保育所の園長先生、教職員の皆様のご協力があったて執筆することができました。心より御礼申し上げます。また、論文を執筆するにあたり、ご指導や貴重なご助言を頂きました聖徳大学児童学部教授小田豊先生に心より感謝申し上げます。

## 注

- 1) ボルトマンによって提唱された概念で、発生論の立場からヒトにはほかの動物の種とは違う発達の独自性があることを論じている。哺乳動物は「巣に座っているもの（就巢性をもつもの）と、巣立つもの（離巢性をもつもの）」とに分けられる。人間は離巢性を持つ種に属しているが、誕生時の様子は、そのタイプの他の種が備えている様相とは大きく違っていて、生後1年経ってからやっと、直立姿勢を備え、特有のコミュニケーション手段（言語）を備えるようになる。ヒトの赤ん坊は、あたかも1年間早く生まれたようで子宮外で胎児期を過ごすかのようであると説明している。また、乳児期を子宮外胎児期と呼んでいる。
- 2) ここで $\chi^2$ 検定を行った理由は、期待度数と観察度数との食い違い判断基準を便宜的に設定するためである。

## 引用・参考文献

- 安達隆, 2001, 「保育労働者の労働と健康をまもる対策（特集 保育労働者の安全衛生活動）」『労働と医学』, 第70号, pp.20-25.
- 赤堀方哉, 2007, 「保育者養成校における領域「人間関係」の指導法としてのロールプレイの可能」『梅光学院大学論集』, 第40号, pp.27-37.
- 秋田喜代美・佐藤学・岩川直樹, 1991, 「教師の授業に関する実践的知識の成長—熟練教師と新任教師の比較検討—」『発達心理学研究』, 2(2), pp.88-98.
- 芳賀明子・西脇二葉, 2007, 「保育者のキャリア発達に関する基礎的研究」『武蔵野短期大学研究紀要』, 第21号, pp.121-126.
- 上村眞生, 2012, 「保育士のメンタルヘルスに関する研究—保育士の経験年数に着目して—」『保育学研究』, 50(1), pp.53-60.
- 上村眞生・七木田敦, 2006, 「保育士が抱える保育上のストレスに関する研究—経験年数及びソーシャルサポートとの関連からの検討—」『広島大学大学院教育学研究科



- 紀要』, 3(35), pp.391-395.
- 梶田正巳・杉村伸一郎・桐山雅子・後藤宗理・吉田直子, 1988,「具体的な事例へ保育者はどう対応しているか」『名古屋大学教育学部紀要』, 教育心理学科第35巻, pp.111-136.
- 片山美香, 2016,「若手保育者が有する保護者支援の特徴に関する探索的研究—保育者養成校における教授内容の検討に生かすために—」『岡山大学教師教育開発センター紀要』, 第6号, pp.11-20.
- 加藤由美・安藤美華代, 2012,「新任保育者の抱える困難に関する研究の動向と展望」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』, 第151号, pp.23-32.
- 加藤由美・安藤美華代, 2013a,「新任保育者の抱える困難—語りの質的研究—」『兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科教育実践学論集』, 第14号, pp.27-38.
- 加藤由美・安藤美華代, 2013b,「新任保育者の抱える職務上の困難感の要因に関する研究—新任保育者と中堅・ベテラン保育者および園長との比較」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』, 第154号, pp.15-23.
- 岸正寿・戸田大樹・荒木由紀子, 2017,「保育内容「人間関係」の指導法に関する一考察—幼児期の人間関係の形成に着目した事例の検討を通して—」,『創価大学教育学論集』, 第69号, pp.109-127.
- 小松秀茂・杉山弘子・東義也・荒川由美子, 2009,「保育者が養成校に求めている学び〜卒業後2年目の保育者への質問紙調査から〜」『尚絅学院大学紀要』, 第57集, pp.79-90.
- 倉橋惣三, 1976,『育ての心（上）』 フレーベル館, pp.29-30.
- 三木知子・桜井茂男, 1998,「保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響」『教育心理学研究』, 46(2), pp.203-211.
- 三谷大紀, 2007,『保育者の専門性とは 佐伯胖編 共感 育ち合う保育の中で』 ミネルヴァ書房, pp.109-113.
- 三宅幹子, 2005,「保育者効力感研究の概観」『福山大学人間文化学部紀要』, 第5巻, pp.31-38.
- 森上史朗, 2000,「保育者の専門性・保育者の成長を問う」『発達』, 2000, 21, pp.68-74.
- 永瀨美香子・橋口文香, 2014,「保育者養成校の学生に求められる人間関係力」『日本保育学会第67回大会発表論文集』, pp. 127
- 中俊博, 1996,「保育者の保育観—幼稚園と保育所の比較から—」『和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要』, 第6号, pp.129-142.
- 西坂小百合, 2002,「幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス, ハーディネス, 保育者効力感の影響」『教育心理学研究』, 50(3), pp.283-290.
- 小野寺敦子, 2005,「保育士がとらえた苦労—経験年数と性格特性に焦点を当てて—」『目白短期大学部研究紀要』, 42, pp.91-105.



- Portman, A., 1961,『人間はどこまで動物か—新しい人間像のために—』（高木正孝訳）岩波新書.
- 斎木久代・上田哲世・中川香子, 2004,「保育者が『問題と感じていること』について—保育経験, 保育所と幼稚園による差異, 1980 年代調査との比較—」『保育士養成研究』, 第 22 号, pp.1-10.
- 齋藤恵美・田中紀衣・村松公美子・橘玲子・宮岡等, 2009,「保育従事者のバーンアウトとストレス・コーピングについて」『新潟青陵大学大学院臨床心理学研究』, 第 3 号, pp.23-29.
- 佐藤有香・相良順子, 2017,「保育者の経験年数による「幼児理解」の視点の違い」『日本家政学会誌』, 68(3), pp.103-112.
- 社会法人全国保育士養成協議会, 2009,『指定保育士養成施設卒業生の卒後の動向及び業務の実態に関する調査報告書 I』, 保育士養成資料集, 50, pp.246-327.
- 杉村伸一郎・桐山雅子, 1991,「子どもの特性に応じた保育指導: Personal ATI Theory の実証的研究」『教育心理学研究』, 39, pp.31-39.
- 高濱裕子, 1998,「幼児の個人差と保育者の対応—問題解決プロセスを通じた検討」『会津大学短期大学部研究年報』, (55), pp.117-136.
- 高濱裕子, 2000,「保育者の熟達化プロセス: 経験年数と事例に対する対応」『発達心理学研究』, 11(3), pp.200-211.
- 高濱裕子, 2001,『保育者としての成長プロセス』 風間書房, pp.46-49.
- 谷川夏実, 2013,「新任保育者の危機と専門的成長—省察のプロセスに着目して—」『保育学研究』, 51(1), pp.105-116.
- 吉田満穂・片山美香・高橋敏之・西山修, 2015,「保育者経験年数から見た気付き体験の特徴」『岡山大学教師教育開発センター紀要』, 第 5 号, pp.9-18.

## **A Study of Consciousness of Pedagogy of “Human Relationship”**

**— Based on the Result of the Questionnaire with a Focus on Childcare  
Teachers Years of Experience —**

**Masatoshi KISHI Daiki TODA Yukiko ARAKI**

### Summary

The study we conducted a questionnaire survey to examine consciousness of pedagogy of “human relationships” by childcare teachers years of experience. The target of the questionnaire is kindergarten teachers and nursery teachers (N=70). Experienced childcare teachers evaluated the learning of the college of early childhood education and showed that they are taking childcare taking “acceptance and sympathy” into consideration. The novice childcare teachers were dissatisfied with the learning of the college of early childhood education and showed confidence and response in the leadership skill of pedagogy of “human relationships”. It was suggested that it is important for novice childcare teachers to reflection on their childcare.